

第5回 二ノ坂 保喜氏 講演要旨

〔 開催概要 〕

- テーマ 「人権運動としてのホスピス～日本のホスピスはどこへ向かうのか?～」
- 講師 二ノ坂 保喜氏 (医療法人 にのさかクリニック 理事長)
- 日時・場所 2023 (令和5) 年4月8日 (土) 15:00～、ZOOMによるオンライン開催及び一部会場聴講
- 聴講者 186名 (オンライン参加 181名、会場 5名)
- 主催 NPO法人ホスピスのこころ研究所
- 共催 ホスピス財団、日本ホスピス緩和ケア協会、日本死の臨床研究会

〔 講演要旨 〕

○ はじめに

- ・タイトルを『人権運動としてのホスピス』に、サブタイトルを『日本のホスピスはどこへ向かうのか?』とした。これは開業以来ずっと考えてきたこと。加えて、これから私たちはどんなことを考えて動いていけばよいのかということをお聞きの皆さんと一緒に考えていきたい。

○ 関本剛さん

- ・関本剛 (せきもとごう) さん、非常に優秀な緩和ケア医で、関本クリニックので院長として活躍されている最中に肺がんを発症して、昨年45才で亡くなりました。
- ・彼の言葉から「家に帰れない患者はいない。全ての患者が自宅に戻ることを希望しているわけではないが、自宅に戻りたいと希望する患者であれば在宅ケアに移行できる可能性がある。」「医療者がバリアとならないように。医療者の側が退院できないと判断するのではなく、どうすれば自宅に帰すことができるだろうかと、まず考えてみるのが大切。」、私も全く同じことを思う。もう一つ彼が大事にしていた言葉、確かデーケンさんの言葉だったと思うが、「人間は死の瞬間まで成長し続けることができる。」。彼は最後まで成長を続けた。私たちはまだまだ学ぶところがあると思う。

○ ホスピスの“ホ”の字から①_Uさん*夫妻

- ・Uさんご夫妻です。ご主人は胃がんで最後家に帰って亡くなった。奥さんも亡くなったが、お二人の在宅を見てきて思うこと。彼らは「ホスピス」という言葉、それから「ホスピス」の意味を知っていたか。おそらく「ホスピス」の“ホ”の字も知らないだろう。だけど、彼らがやったこと、私たちが支えたことは「ホスピス」といっていいんじゃないかなと思う。
- ・私たちは「ホスピス」をしっかり勉強して、知識や技術を獲得してホスピスケアを提供しているのではなく、「ホスピス」を学びながらやっているんじゃないか。「ホスピスの“ホ”の字から」には、「ホスピス」の“ホ”の字を知らない人たちこそホスピスをやっているんだということと、「ホスピス」の“ホ”の字から始めて学びながらやっているということの二つの意味を込めた。

※ 講演では実名で話されたが、本紙では名を伏せる。

○ ホスピスの“ホ”の字から②_『ホスピスへの遠い道』との出会い

- ・岡村昭彦の著書『ホスピスへの遠い道』。初めてこれを見たのが1980年代のはじめ頃。私自身がこの時代のこういう考え方に対する知識が無かったということと、非常に強く訴えかける、石つぶてを投げつけられるような感じの文章に、とても読みづらかった。同時に、それだけ強い思いがあるんだろうと思った。
- ・元々は看護師向けの雑誌に連載されたもの。彼は連載しながら、看護師向けのゼミ、主婦を相手にした勉強会など全国各地でやっていた。アイルランドだとか世界でもそういった活動をやってきた。過去にイギリスはアイルランドに対していろんなひどい仕打ちをした。そういう中で、アイルランドにおけるホスピスが生まれてきた。そういったことが書かれていた。読みづらかったけれども一生懸命読んで、その中に出てくるいろいろな本を探して読んだ。岡村昭彦の本の中味とか背景とか、サポートしていく考え方を学ぶのに大変役に立った。ぜひ皆さんにも見ていただきたいと思う。

[講演要旨]

○ はじめに～ホスピスの“ホ”の字から③_在宅ホスピスの世界で学んだこと_家族の気持ちの変化

- ・私が在宅ホスピスをやってきてよかったと思うのは、患者さん本人の生き方や家族関係とか、心を打つような人が多かったということ。（以下、いくつかの実例を挙げ説明された。中には、小学4年生に向けて在宅ホスピスに関する特別授業を行ったところ、児童の興味が高じて、後日児童と患者さんご家族との対談に発展。在宅ホスピスを通じて子ども達の心の中にもいろんなことが芽生えていく可能性についても紹介された。）
- ・在宅ホスピスから学んだことはたくさんある。一つは、家族の気持ちの変化。在宅をスタートするときは不安は100パーセント。ところが毎日毎日、私たちも含めて、訪問看護、ヘルパー、ケアマネ、近所の人たち、ボランティアの人たち、いろんな人のサポートがあってやっていくにつれて不安が少なくなっていく。そしてその中で一緒に過ごすことの幸せを感じる。そうすることによって穏やかな看取りにつながる。だから在宅チームの役割というのは、そういう患者さんや家族の安心と希望を支えることではないかと思う。

○ はじめに～ホスピスの“ホ”の字から④_在宅ホスピスの世界で学んだこと_納得できる最期のための条件

- ・それから、たくさんの人たちからいろんな姿を見せてもらいながら学んだことは、「グッド・デス」「望ましい死」、今の私の言葉で言うと「納得できる最期」のための条件。この5つがあるのではないかと思う。一つは、本人が人生を全うできたと感じること。二つ目は、家族とか、友人とか、職場など人間関係が良好だったということ。三つ目に、最期の時期に納得できる介護ができたかということ。四つ目に、亡くなる時穏やかだったということ。最後に思い出を作ることができたということ。ただ最初の2つ、本人が人生をどう生きたか、全うできたかということと、家族や友人、職場など人間関係がどうだったかということは、病気になって私たちと出会う前の話。だから、私たちができることは、納得できる介護ができたかとか、最後は穏やかだったかとか、多少の協力、多少のプラスになるということ。私たちができることはほんのわずかなんだということを実感する必要がある。
- ・自宅で最後の3、4日ほど見た患者さんの話。50代の若い患者さん、穏やかに最後は亡くなった。その後、私たちが主催する集まりで、亡くなったご主人の奥さんに講話を依頼。彼女が話したのは、二人の馴れ初めから始まり、こんな楽しいことがあって、あんなことがあってと。最後の時期の話はもうほんの少し。なるほど、彼女と彼の人生にとっては、二人が一緒に過ごしたことが大事なのであって、最後の時期に痛みをとったとか何をしたとかは、変な言い方になるがそれほど大事ではない。もちろんそれがあったから前のが生きてきたということは言えるが、私たちがやっていることは、いいケアをやった、在宅で最後を看取ったということではなくて、彼らの人生にとってどうなのかということを考えなくてはいけないんだということをつくづく思った。

○ はじめに～ホスピスの“ホ”の字から⑤_在宅ホスピスの世界で学んだこと_笑顔の法則

- ・もう一つ「笑顔の法則」。ある患者さんのご長男のお嫁さん。看護師で小学校の保健の先生。「笑顔の法則」というのを作ってみんなに教えているそう。「家族の中で困ったことや心配ごとがあったらみんなと相談して工夫してやりましょう。でもユーモアをもって一緒に笑いながらやりましょう。」そして、「自分たちだけで足りなければ、助けを借りるようにしましょう。」病気の場合にはいろんな人の助けがいる。医者、看護師、介護、ときには行政も。「でもそうやって困ったことを乗り越えていくと、それはみんなの宝物になります。」「そうやって積み重ねていくことができます。」こういうことを教えてもらった。

○ バングラデシュ・ケララ～世界に目を向けて①_手をつなぐ会の活動を通じて

- ・私が関わり始めたのは1989年くらいから、30年余りになる。「バングラデシュと手をつなぐ会」を通して、バングラデシュのカラムディ村というへき地の村でいろんな活動を届けてきた。小学校を作ったり、母子保健センター、今はジョンダン病院に変わったが、病院として95年にできた。その間、バングラデシュの看護師、学校の先生や医者を日本に招いたりとかいうようなことも行っている。
- ・バングラデシュの高校で子どもと対談。国の誇りは何かと問うと、独立した国家であるということの次に出たのが、自分たちの言葉で自由に話せるということ。バングラデシュでは分離独立の歴史の中、国語の統一にも苦難。バングラデシュで言葉を守るために人が殺されそして独立した日が、国際母語デーとされている。
- ・2017年にオープンした看護学校では2019年に初の戴帽式を行った。これら会の活動は会報誌「Milonミロン」にまとめて発行。
- ・緩和ケアに目を向けると、私たちの活動ではないが、世界ホスピス・緩和ケアデーに合わせた「Before I Die」という自分が死ぬ前にしたいこと書き出すイベント、在宅医によるへき地のナース向けの緩和ケア啓発活動、緩和ケアに惚れたと語った女性医師を紹介する。現在世界では5千万人とも言われる人が緩和ケアを必要とし、その80%は十分な緩和を受けられず、そしてその80%の多くは開発途上国という。こうした現状を私たちは知るべき。

[講演要旨]

○ **バングラデシュ・ケララ～世界に目を向けて②_ケララへ、スレッシュ・クマールさんとの出会い**

- ・2004年11月、インドのケララ州で、インターナショナル・ワークショップ・オン・コミュニティ・パーティシペーション・イン・パリアティブ・ケア International Workshop on Community Participation in Palliative Care という緩和ケアの国際ワークショップに参加。そのときスレッシュ・クマールさんというインドの緩和ケアのドクターと出会った。僕にとってとても大きな出来事だった。
- ・その縁で2017年に久留米で開かれた日本ホスピス・在宅ケア研究会の全国大会にスレッシュ・クマールさんを招聘。1500人入る講演会場はほぼ満員だった。彼の話を紹介して学んでいきたい。

○ **バングラデシュ・ケララ～世界に目を向けて③_コミュニティヘルスケア①**

- ・終末期の人に向き合うということは、自身の技術や知識を、患者の苦しみを緩和するためにどのように用いることができるか、あるいは、苦しんでいる人に対して自分がどうしたら思いやりのある存在になれるかということ、自分自身を考えてみようというようなこと。
- ・進行した問題の多くは非医療的なもの。地域のコミュニティはこれらの問題を扱うのに大きな役割を果たす。私たちがつい医療者として医療的に解決しなければいけないと思いがち。痛みとか確かに医療で解決できるが、自分が死んでいく意味、これから子どもたちに何を伝えていけばいいのかとかいった問題は医療以外のこと。地域の中でコミュニティが力を持っているか持っていないかということによって、大きく違ってくるんじゃないかと思う。
- ・進行した疾患の患者は、残された人生において医療的看護的ケアに加えて、継続的な社会的、精神的、スピリチュアルなサポートを必要とする。こういったケアはアクセスしやすく住まいにより近い所にあるべき。コミュニティによるケア。
- ・しかしコミュニティも様々。良質な緩和ケアというのは、コミュニティにおける幅広い支援ネットワークがあり、そのコミュニティで、訓練や必要な場合の受入れなどの組織的な協力、バックアップがあること。私たちがこれを目指しているところ。

○ **バングラデシュ・ケララ～世界に目を向けて④_コミュニティヘルスケア②**

- ・コミュニティケアとパブリック・ヘルスとの関わりについて。「パブリック・ヘルス」は「公衆衛生」と日本では訳される。公衆衛生では、上からスペシャリストケア、専門家による専門的なケア、そしてプライマリヘルスケア、そしてボランティアによるコミュニティケアと（いうピラミッド構造で）説明される。土台（コミュニティケア）がしっかりすることによって必要なものが生まれてくるということ、スレッシュ・クマールさんは言う。
- ・そして（緩和ケアのイベントを引き合いに）「死にゆく人をケアすることは、変革の体験である。ケアされる人にとっても、ケアする人にとっても。」と言う。私たちが同じ。これを私たち自身が振り返ってみることも大切。
- ・「e Hospice」というウェブサイト、とても有用。世界中のホスピス運動の情報がある。そこからクマールさん達が行っている「キュリオス」というお祭りを紹介する。「キュリオス」は好奇心の意。緩和ケアについての認識を高め、患者さんのために資源を動員し、より思いやりのある世界を作ろうとするのが目的。今年のテーマは、コンパッション、思いやりを祝おうというもの。思いやりの心は理解することで苦しみを和らげたいという共通の願いを抱く、人類にとって不可欠な絆とのこと。

○ **世界に学び、世界に発信を① Compassionate Communities**

- ・アラン・ケレハーの著書「コンパッション都市 compassionate cities」。日本では「コンパッション都市」というタイトルで「公衆衛生と終末期ケアの融合」という副題を付け出されている。共感と行動をもたらす「コンパッション」に支えられたコミュニティ、人間に不可避の老い、病、死、そして喪失を受け止め、支え合うコミュニティを作るにはどうすればよいか。コンパッション都市の基本的な思想、理論と共に実践に向けたモデルを解説したもの。今の日本にとっても大切な本だと思う。
- ・もう一冊、藤田早苗の著書「武器としての国際人権」。「コンパッション」、「思いやり」と訳するのが妥当と思うが、コンパッションと人権の問題を重ねて考えるべきでないかと思うが、この本には大切なことが書かれている。人権の運動は闘いの歴史。人権を守るのは国の役目。単に、やさしさとかおもいやりとか、みんなで子ども食堂をやりましょうとか、住民の責任、自己責任に移してしまうというのは少し違う。ただその国の問題とすれば内政干渉として限界。人権の国際化、国連や地域の人権保障制度のもとで打ち立てられた規範と制度としての「国際人権」が必要ではないかと説く。
- ・障害者施策では日本はやや遅れ気味、国連から改善勧告が出された。入管でのウィシュマさんの死は記憶に新しい。医者がいたはずなのにとても残念に思う。こういったことにみんなで関心を持ってやっていくべき。

[講演要旨]

○ 世界に学び、世界に発信を② Compassionate Communities

- ・昨年9月、パブリック・ヘルス・パリアティブ・ケア・インターナショナル・カンファレンス Public Health Palliative Care International Conference、公衆衛生又は緩和ケアの国際会議に当クリニックから参加。参加したスタッフ曰く「世界は広くて世界は近い。」、参加者はフラットでフレンドリーな雰囲気の中真剣な議論。多くの人々が世界各地で実践し研究し、同じように悩んでいた。イクイティequity、公平であることの視点が大切だと。そこで発表の中から一部を紹介する。
- ・にのさかクリニックのテーマとして「いのちにどう寄り添うのか。」「地域社会にどう関わるのか。」が大切。にのさかクリニックのコンパッションエイト・コミュニティ compassionate community、具体的には、在宅ホスピスケア、健康教室、在宅ホスピスを語る会、遺族の会、あゆみねっと、在宅ホスピスボランティアの会、デイホスピスなど。医療の枠を超えて多彩な人々がつながり共に参加するといういろいろな活動をしている。
- ・在宅ホスピスボランティアの「手と手」は、現在40名ほどが活動。「療養されている方、その家族に寄り添い、優しさで笑顔でその人らしさを支える。」ということを理念として、在宅チームの一員として活動。お話し相手、見守り、お留守番役として自宅を訪問、クリニックの2階でデイホスピス「カフェひわまり」を運営、外出やイベントと一緒に行く、あるいは、手紙を代筆することも大切な役割。
- ・私たちの活動をまとめるとコミュニティで思いやりの種を育てるということ。誰もがその思いやりの種を持っている。私たちは患者中心の医療を、それから意思決定支援を行いケアを提供する、そして私たち自身も個人的な変革を体験し、患者さんや家族の変革の体験もあるだろう。そういうことを通じて互いに他人への思いやりが生まれ、コンパッションエイト・コミュニティズcompassionate communities に広がっていく。

○ To Comfort Always

- ・デイビッド・クラークの著書「トゥ・コンフォート・オールウェイズ To Comfort Always」。19世紀からの緩和医療の歴史に関する本。日本人が見落としているたくさんの方が書かれている。翻訳し刊行したいと考えている。
- ・著書の第7章の最後の節「ヒューマン・ライツ human rights」から。「緩和ケアは人権であるという認識が広まりつつあり（中略）経済的、社会的、文化的権利に関する国際規約第12条、市民的及び政治的権利に関する国際規約第7条により、各国は患者が緩和ケアや疼痛治療を受けられるようにするための措置を講じる義務がある。」「同様に、（中略）緩和ケアへのアクセスは、国連条約で認められているように法的義務」。しかし、全ての国が簡単にはいかない。緩和ケアを西洋の視点から人権問題としてとらえて、途上国が達成困難な基準を設定するというのはまだまだ難しい。ヒューマン・ライツ・ウォッチ human rights watch、国際的にも有名なNGOの一つ、国家や国連だけではなく、そのようなNGOも緩和ケアに正当な関心を寄せており、それは今後も続くと思う。
- ・緩和ケア発展の世界地図 Mapping Levels of Palliative Care Development、緩和ケアが世界各国でどの程度発展しているかを示した世界地図。その評価項目には、国連の人間開発指数 ヒューマン・デベロップメント・インデックス human development index も取り入れられている。こういうものも指標にしないといけない。地図の中で日本が一番色が濃い、発展している国とされている。問題点は多々あるが。
- ・今日紹介した書籍「ホスピスへの遠い道」「To Comfort Always」「武器としての国際人権」。ホスピス運動は思いやりとか優しさとかとても大事だが、これからは、それと同時に人権、あるいは国際人権いうことをもう一つの大きな柱にしないといけないんじゃないかなと思う。「コンパッション都市」これもこれからの大切なテーマになっていく。
- ・2017年は私にとっては二つの意味。セント・クリストファーズ・ホスピスが創設されてから50年、アフター・シシリー・フィフティというウェブサイトができていた。ものすごく面白い。そしてその年から私のクリニックでも世界ホスピス緩和ケアデーの展示や活動を始めた。こうしてこれまでの歴史を振り返りながら、これからのホスピス運動を進めていけたらいいと思う。ご静聴ありがとうございました。

[対談要旨]

○ 前野宏 NP0ホスピスのこころ研究所・理事長（以下「前野理事長」という。）

- ・二ノ坂先生ありがとうございました。ホスピス・緩和ケアというと、私たちはどうしても医療が中心になりがち。けれどその人の人生、ご家族の人生にとってはそれは小さな部分。より大きな枠組み、二ノ坂先生のいうコミュニティの役割というのが非常に重要だと改めて教えていただいた。
- ・新しい概念として、コンパッションネイト・シティ、コンパッションネイト・コミュニティ。私もコンパッションは大事なキーワードだと思う。日本語ではぴったりとした訳が難しい。コンcomは共に、パッションpassionは苦しむ、共に苦しむという言語的な意味があり、根源的には思いやりよりも深い意味があるように思う。新しいキーワードとして世界中でも言われるようになってきたと。本当に興味深く、そして感慨深い。
- ・さらに二ノ坂先生の話はホスピスから、苦しみを抱えている人、障害を抱えている人の人権へと広がっていく。緩和ケアは人権である、私たちも考えていかなければならないんだと思う。
- ・今日はネットを中心に200人近い方が聴いてくださった。ご意見、ご質問を聞いていきたい。まず、チャットから「貴重なご講演ありがとうございました。緩和ケアは人権運動という考え方に深く賛同いたします。環境問題などのほとんどの市民運動は人権運動だと思います。本の出版を楽しみにしています。」というご意見があった。それでは会場からどうぞ。

○ 会場から①

- ・先生がいろいろ影響を受けた書籍などの紹介をいただいたが、それ以外に何か先生の活動を駆動するというかドライブになっているものがあるのかというのが一つ。もう一つは先生の哲学的視座というか、物事を見るものの何か、こういう自分の視点で見ているみたいなことについて教えていただきたい。

○ 二ノ坂保喜先生

- ・僕に何か特別な、例えば信仰があるとかはなく、子どもの頃に、原爆が落ちた長崎の浦上天主堂の下に住んでいたということ、カトリックの幼稚園に行っていたということは、今になって思うと少しはあるのかもしれないが、それで強い影響を受けたという印象はない。ずっと子どものころから自分なりの考え方を作ってきたがいい先生に恵まれたというのものもあるのかもしれない。ただ思っているのは、これから日本のホスピスにとって大事だと思うのは、自分たちで考えるということ。日本の場合、外国から輸入したものをどう日本に適用させるかということが多く思う。ホスピス運動にしても、いいものを持ってきたのと同時に長いこと日本の中で育ってきたというものもある。それをホスピスと呼ぶ、呼ばないは別として。いろんなコミュニティのあり方とか、ケアのあり方とか、エンド・オブ・ライフ・ケアの日本的なやり方とか。もっとそういうのを発掘し、私たちも身につけていってもいい。そういう風に自分で考えるということが大事なと思う。

○ 会場から②

- ・先生の2017年にされた大会のテーマ「いのちを受けとめる町づくり」、私も大きな夢として札幌全体が緩和ケアの町になるといいなとふんわりとした思いがある。先生ご自身「いのちを受けとめる町づくり」の具体的な構想があれば是非お聞きしたい。

○ 二ノ坂保喜先生

- ・実は「いのちを受けとめる町づくり」は、一緒に活動してきた米沢慧さんが言い出した。僕はちょっとぼんやりしすぎな感じがあって使い切れなかった。でも、やっぱり私たちがやろうとしているのは、いろんな形でいのちをどう見るか、どう受けとめるかということだと気付いた。最近、「コンパッションネイト・コミュニティ」は「いのちを受けとめる町づくり」でもいいのかとも思う。自分たちが何を作っていくのか、何をしていくのかということとそれをそれぞれがやっていくことで、できてくることかなと思う。ちなみに、今度の日本ホスピス・在宅ケア研究会の第30回の大会は仙台。テーマは「“情げぶけえ”コミュニティ」。仙台の言葉で「情け深い」という意味。そっちの方がイメージとしてぴったりくる。いろんなことをそれぞれの言葉で言ってもいいのかなとも思う。

[対談要旨]

○ 前野理事長

- ・コンパッションネイト、思いやりのあるケアという話になると、自分がそうだとはいえ口幅ったく言い難い思いもある。真摯に患者さん、ご家族に向き合うことが逆に自分をそういうところに連れてってくれる、目指すところはそういうところなんだろうと思う。このキーワードで皆さんと考えたりすることがもう少し必要なと思う。
- ・先ほど二ノ坂先生から今後の日本のホスピス・緩和ケアで足りないもの、目指すところは自分たちで考えてと、あった。この50年をどういう意味があって、達成したもの、達成できなかったもの、もう一度最後のまとめとしてお話していただけるとありがたい。

○ ニノ坂保喜先生

- ・簡単にいくつかまとめると、一つは、日本のホスピス運動の中で欠けているのは、在宅の考え方ということ。例えば、シシリー・ソンドースはセント・クリストファーズができてすぐ在宅を始めている。なぜかというと、症状が落ち着けば家に帰りたいという当たり前の患者さんの要望に応えた。患者さんの要望に応えるということが大切なことで、技術を磨いて痛みを取るということは必要なことだけれども、それは患者さんの要望に応えるためだということが大切なこと。日本のホスピスの中で在宅プログラムを持っているところはまだ少ない。札幌はやっているが、そこが生まれにくいということは、一つ大きな問題と思う。
- ・このことには、ホスピスがコミュニティの中に根付くかどうかというとても大切なテーマが隠れているんだと思う。コミュニティに対してホスピスがどういう役割を果たせるのかということを考えないといけない。もちろん患者さんを受け入れる、症状を緩和する、可能ならば家に帰す、そういうことはもちろんだが、啓発とか働きかけをコミュニティに対してしていかないといけないんじゃないかなと思う。それが結果として、コンパッションネイト・コミュニティを生み出していくんじゃないかなと思う。

○ 前野理事長

- ・ホスピスがコミュニティにどのように働きかけるか、コミュニティの中でホスピスがどう生きていくかではなく、もっと積極的に町にどうしようか。その先駆者が二ノ坂先生。今日のお話はすべてのホスピス・緩和ケアに携わる人に聞いていただきたい、私たちの課題を教えられたような気がする。
- ・いくつかチャットを紹介する。「何も新しいことを始めるのではなく、『人権』と言う概念を念頭におきながら、つい数十年前まで日本で脈々と続いていた『結』『惣』で行われていた互助を復活させることなのかあと感じました。」「いのち受けとめるまちづくり、ぴったりかもです。皆さん仙台へおいでください。」「二ノ坂先生、素晴らしいご講演をありがとうございました。先生が以前仰った『知らないということは、ないことと同じ』という言葉が私の心に深く根付いております。今日もたくさんの学びと気づきを得ることができました。これからもいろいろ知っていくことで世の中の一助になりたいと思います。」などの感想。それと「戦争などコンパッション都市に逆らう今の世の流れに、どう立ち向かっていけばよいのでしょうか？」これは質問だが、先生どうか。

○ ニノ坂保喜先生

- ・今は答えがないというのが答え。世界的には何とかしようという動きが出ているし、やっている人もいる。以前NGOの集まりに出たときの話。高校生だと思われる女の子の質問「みんなが平和を望んでいるのにどうして世界は平和にならないんでしょうか。」。会場からはわかりきったことをと笑いが起きた。そのとき、これが問題なんだなと思った。それをまともに受けて、じゃあどうしようかと進めていかないと絶対先には進まない。それと全国いろんなところに行つて思う。各地でいろんなことをやっている人たちがいる。戦争のこと、人権のこと、障害のこと、教育のこと。そういう人たちが協力しあっているいろんなことをやっていく、それを積み重ねていくことで、戦争が無益であるということを、金儲けのために戦争をやっている人たちに諦めさせることができるか、あるいは、その前に我々人類が減んでしまうのかというくらいに、もうなっているんじゃないかなと思う。

○ 前野理事長

- ・一人ひとりが考えていく、特に私たちはホスピスの現場からコンパッションネイトというようなことを真剣に考えていく、どこかでそこにつながっていくのかもしれない。本当に一人ひとりが考えたいと思う。
- ・たくさんのチャットもありがとうございました。今日はすべてのホスピス・緩和ケアに携わる従事者に聴かせたいお話。コロナもだいぶ緩和され対面で先生のお話を聴けるような世の中になってきた。これからもお身体に気を付けて私たちの後輩のためにたくさんのメッセージを語っていただきたい。今日はどうもありがとうございました。

○ ニノ坂保喜先生

- ・ありがとうございました。